

〔総合人間学篇〕

【研究ノート】

音楽療法における笑いとユーモア

木村博子

Laughter and Humour in Music Therapy

Hiroko KIMURA

要旨

Recently the therapeutic power of humour and laughter has been attracting interest in various health-care settings. Although laughter and humour can have a similar therapeutic effect as music, such as reducing stress, strengthening the immune system, etc., there are few studies in music therapy that connect the two and the use of humour is not widespread enough in music therapy sessions. The author has been integrating laughter and music therapy for several years and found the theory of incongruity useful, for example, in parodies or musical comedy of old popular songs. Furthermore, the author considers the benign violation theory of McGraw can indicate some direction for the practical use of laughter and humour, especially in creating a warm atmosphere for music therapy. The author analyses several past examples from her sessions using McGraw's theory and considers some more effective techniques.

キーワード：笑い、音楽療法、ユーモア、無害な逸脱理論、高齢者

はじめに

笑いとユーモアに関する議論は古来より存在するにもかかわらず、いつの時代にも傍系として扱われてきた。ひとつには「滑稽」という状況そのものが「不謹慎」や「不真面目」なイメージに結びつきやすく、議論やアカデミックな研究の対象となりにくいという性質が影響していよう。さらにその多様性——何をおかしいと思うかについての感性が時代や民族によって異なる——のために標準化が困難であり、「予想を裏切る」ことによって成り立つという、およそ科学的とは言えない側面を持つことも学術研究の主流となりにくい要素である。とはいえ、近年笑いやユーモアに関する研究は新たな広がりを見せてきた。神経科学の発展を背景として、神経心理学や社会心理学は科学的な手続きの下にユーモアや笑いにおける情動と身体との相関や社会的機能に関して多くの研究成果をあげている。古代ギリシア以来の哲学者たちの論考は今や実験や検証を通して新たな知見へと進展しているが、その背景にはユーモアを重要なコミュニケーションツールや衝突回避の手段として注目する産業界や複雑化する人間関係に対する療法的役割への期待という現代社会特有の事情もあろう。とはいえ、先進的な研究をもってしてもユーモアや笑いという多義的な人間行動を包括的に説明する理論を打ち立てることは難しく、複数の理論が林立する状況にある。

社会的注目とニーズが先行し、その科学的根拠が未だ曖昧という点において、ユーモアや笑いは音楽療法と類似している。様々な科学的アプローチが試みられているにも拘わらず、音楽がなぜ、どのように働きかけて人間に変化を起こさせるのかはわかっていない。効果だけが確認され、実践が先行している状況はユーモア研究と共通する。ユーモアや笑いと音楽の共通点は、その他にも世界中どの民族にもあること、文化差があること、(恐らく)人間のみが生得的に有する能力であること、社会的機能をもつことなど多く確認される。この小論はユーモアの「不調和理論 (Theory of Incongruity)」の中でもマグロウが提唱する「無害な逸脱理論 (Benign Violation Theory)」を中心にユーモアや笑いがどのような特質や機能を持つかを検討し、それが音楽療法、わけてもコミュニティ音楽療法においてどのような効果を持ちうるかを考察する。

1. 不調和理論について

ユーモアを面白いと感じるのはなぜか、あるいはユーモアの原理は何かということについては多くの書物が以下の3つの理論を主要なものとして紹介している；優越理論、不調和理論、放出理論がそれである。優越理論は、笑いは他人に対する優越感の表現で、ホブズが笑いを「他人の弱点あるいは以前の自分と比較することによって生ずる自己の卓越性についての突然の大得意」¹と表現したのがその典型である。放出理論とは、笑いが蓄積された体内のエネルギーを放出させ、緊張を軽減するとするもので、スペンサーの「笑いは余剰となった神経エネルギーが行う発散」²、またフロイトによる「笑いは以前はある心的通路の備給に使われていた心的エネルギーの量が使えなくなり、その量が自由に放散できることになった場合に成立する」³を代表とするものである。笑いには社会規範上本来ならば不適切な感情や恐怖を、社会的に許容できるかたちで解放する機能があり、社会規範からの逸脱であると同時にそれを強化する側面もあるとされる。これらの理論は嘲笑や冷笑など笑いやユーモアに含まれる攻撃性やネガティブな側面も包含しており、笑いの総合的理解のためには有益であるが、ここではポジティブな笑いやユーモアを作り出すために有効なもう一つの代表的な理論である「不調和理論」を中心に考察を進めたい。

不調和理論とは、日常的な秩序だった世界で生成される認知パターンと合致しない何事かを経験する時に笑いは起こるとする理論である。これはユーモアとは何かということに関する認知上の問題をあつかうもので、多くの下位理論を持つ。その歴史もアリストテレスに遡り⁴、カントの「笑いは或る張りつめた期待が無へと突如として一変することにもとづくひとつの情動である」⁵によってユーモア理論の主流となった。ショーペンハウアーもまた「すべての笑いの原因は、要するに何らかの原因を通じて把握されたある概念とそれに関して思い及んだ現実の対象との間に不調和を突然見出すことであり、笑いそのものがまさにこの不調和の表出なのである。」と述べている⁶。現実界には様々なスキームが存在しており、それらをうまく調整して論理的に把握することで我々の世界観は安寧を保っている。ユーモアはその調和を一時的に外して組み替えることであり、個人や集団の意識をいわばリセットする機能を持つ。ケストラーはユーモアを創造的活動の一端とみなし、一つの状況または事象を、二つの通常互いには相いれない脈絡によって知覚する二元的結合に基づくものだと述べる⁷。

「不調和」もしくは「ズレ」という本来不快なはずの感覚が、おかしさや温かさなどの心地よい感覚を引き起こすのはなぜだろうか。または突然生起するという瞬発性、驚きも本来悟性にとっては困

惑させるものとなり得るが、これがむしろ快と感じられるのはなぜであろうか。

社会学者バーガーは西洋のみならず東洋にも滑稽哲学が存在するという。彼は「滑稽とはなにか」という問いに対して禅宗の公案を引き合いに出す：

問 諸仏を超え、祖師を超えるとは、どういうことですか。

答 ゴマ入り餅だ。

(中略)

道教と仏教のはざまには、滑稽哲学のありとあらゆる要素が出そろっている。世界はズレのかたまりだという診断。偉大と見えるもの、知恵深いと見えるものに対する徹底的な仮面暴露。何でも容赦なくからかって笑う不敬の精神。そしてその結果としての、深い自由の発見⁸。

ユーモアの知覚は、日常的に受け入れられている現実とそれとは無関係なもう一つの現実が突然顔を出すことによって起こるが、バーガーは「滑稽な経験は世界に対する独特の診断を人間にあたえる。それは観念の、また社会の秩序の表層をつき破ったものを見抜き、表面的な現実の背後にひそむ別の現実をあばき出す。」と述べ⁹、滑稽が有する透徹した洞察力に注目する。発見や啓示は長い苦勞の末突然もたらされる場合が多い。「目からうろこが落ちるように」という表現があるように、それは突然やってきて人間に大なる喜びをもたらす。芸術的感動も同様である。アルキメデスの逸話として知られるエウレカ効果 Eureka Effect は近年「アハ体験 A-Ha Experience」という装いでマスコミの話題にもなっているが、それを体験した人が一様に快の表情をとることも知られている。人間は思索的な動物ゆえに認識の拡大に関して特別な喜びを感じるのではないか¹⁰。

2. 「無害な逸脱理論 (Benign Violation Theory)」について

コロラド大学ボルダー校で心理学とマーケティングの教鞭をとるピーター・マグローウ (Peter Mcgraw) は、2010年に「無害な逸脱理論 (Benign Violation Theory)」を発表した¹¹。優越理論、不調和理論、放出理論のいずれもがすべての笑いを説明するものではないことから、彼はヴィーチの「N + V 理論」¹²に注目してそれを改変し、「無害な逸脱理論」を完成した。それは「ものごとが『正しくない、不安な、または危険な状態』(逸脱)でありながら、同時に『問題ない、受け入れられる、安全』(無害)と思われる場合にのみ笑いは発生する」というものである¹³。マグローウは、1) 逸脱した状況があること、2) その状況は無害であること、3) 1) と 2) が同時に起こること の3点をユーモアが生起する条件としてあげ¹⁴、「こうあるべき」との人の見解を脅かす状況は、それが同時に「無害である」と認識されるときにユーモアとして知覚されると述べる。例えば、「ある人が階段から転げ落ちた」状況は逸脱で気の毒な事態でもあるが、その人が無傷でひょっこり起き上がって「無害」である状況だとわかるとユーモアになり得る。モラルや社会的な逸脱を利用した卑猥で下品なジョークや会話のルールからの逸脱である皮肉も、それを「無害」と感じる向きにはジョークと映る。この理論は従来の理論では説明がつかなかった「くすぐりによる笑い」にも適用可能である。すなわち他人からくすぐられると笑うのに、自分でくすぐってもおかしくはならない。これはくすぐりとは、相手の身体スペースを無害な形で侵害 (= 逸脱) することにほかならないからであり、自分でくすぐ

でも「侵害」にはならないからである。一方、見知らぬ不気味な他人に突然くすぐられたら、その状況は無害ではなく危険と察知され、笑いどころか恐怖が引き起こされることになる。

彼は2010年の論文で5つの実験を行い、この理論の実証を試みる。例えば、「ローリング・ストーンズのキース・リチャーズは、日頃から父親に『自分が死んだら火葬にして遺灰はお前の好きなようにしてよい』と言われていた。父が死去すると、キースは父の遺灰を鼻から吸った」という文（逸脱バージョン）を66人の大学生に提示し、①その行動は「よくない」か「よい」か、②キースの行動は笑いを誘うか否かについて質問した。これには「遺灰を鼻から吸った」という個所を「遺灰を墓に埋めた」と書き直した文（正常バージョン）がコントロール群として設定されている。結果は逸脱バージョンを「よくない」と判断した参加者が多いが（82%）、その行動は笑いを誘うとしたのが38%（コントロール群では5%）、逸脱バージョンを「よくないが笑いを誘う」としたのが29%であった。また、別の73人の学生に、逸脱バージョンと正常バージョンのいずれかを読ませ、「状況は解釈次第で逸脱とも正常ともあるいはその両方を兼ね備えるとも取れる」ことを記した文に目を通させた上で、彼らがそれを「よし」とするか「よくない」とするか、あるいは「よし」とも「よくない」ともとれるかを問い、あわせて彼らが実際に回答の過程で笑ったかどうかを実験者が観察した。結果は逸脱バージョンの方に笑った確率が高かったのは予想通りだが（逸脱バージョン32%、正常バージョン8%）、「『よし』とも『よくない』ともとれる」と答えかつ笑った参加者は、厳格に「よし」あるいは「よくない」と答えて笑った参加者の3倍以上（44%vs13%）に上ったという注目すべきものになった。ここから、逸脱した不調和な状況も「無害」な設定にすれば笑いを誘うことができることが示唆され、ユーモアを作り出す上で有効な手法として評価されるようになった。一方、ラスキンをはじめとする研究者から多くの批判も寄せられている¹⁵。

筆者がこのマグロウの理論に惹かれるのは、「無害」な設定がユーモアの生起には重要だという点である。音楽療法という人々が癒しや励ましを得る空間において、安心できる場の設定は非常に重要であり、その方策としてユーモアや笑いはきわめて有効である。ただ音楽療法士はユーモアの専門家ではないので、ユーモアを作り出すための何らかの方法論や指針があることは大きな助けとなる。「音楽療法は音楽のみを使う療法」という正論はもっともだが、現実問題として音楽だけで勝負できる音楽療法士は実は少ないことを考え合わせると、音楽療法は「音楽のみ」にこだわらず、音楽を中心とする様々な技法の統合形式として再構築する方向性があるのもよいのではないか。マグロウの理論はその意味で大きな示唆を与えてくれる。

3. 「無害化」について

「無害 Benign」という言葉について、マグロウとワーナーは「問題ない、受け入れられる、安全」¹⁶という言い換えをしている。一方「逸脱 Violation」については「正しくない、不安な、または危険な状態」と述べられている。これが同時に起こる、もしくは瞬時のすり替えが起こるのがユーモアだというのである。すなわちユーモアは矛盾する2つのスキームが交差する地点に位置するわけで、その基盤は極めて不安定かつ脆弱であるといえよう。ベルグソンが言うように、笑いはつかまえようとすると消えてしまう泡のようにはかない。ユーモアが成立するためには「逸脱」と「無害」のどちらの

領域も必要で、その矛盾を調整ないしは解決する機能をユーモアは持つが、同時にそれを際立たせる結果を引き起こすこともある。いわば諸刃の剣であり、その扱いには細心の注意が必要である。

「逸脱」を「無害化」する方策はあるのだろうか。マグロウとワーナーは「距離を置くこと」が無害化につながると提案している。身近に起こった出来事や身近な人のことを笑うのは気が引けるが、遠く離れた見知らぬ人や出来事を笑うのは「無害」に近いというのである。彼らはまたコメディアンのアウトサイダー的特質にも言及する。確かに道化をはじめとするプロのユーモリストたちは、社会規範の外から発言することを常とし、それが社会規範に縛られた人々のストレスを低減するとともに、逆に人々の心に社会規範を強める機能も有していた。ここで「逸脱」は社会の維持という「無害化」に成功している。彼らはまたまたコメディと人類学が似ているとするゴジスキの見解を紹介する：「コメディアンと人類学者は、ものの見方が同じなのだ。自分という枠組みの外に立ち、異なる存在に共感することで、その行動や考えをより深く理解しようとする」¹⁷——対象のみならず自己や社会を、その場にいながらにして客観的に見ることを可能にするユーモアや笑いの「無害化」は、単に毒気をぬくことだけでなく、よりポジティブに世界を構築していく糧となり得る。

マグロウとワーナーは世界中を旅してユーモアがどのように作用しているか報告しているが、その中には戦禍のパレスティナやアマゾンの極貧地域も含まれる。それらの地の逸脱の極致のような状況下でさえ人間はユーモアを作り出すことを確認した彼らは、笑いは恐怖を消し去り、逆境を乗り越える力を与え、現実からのしばしの避難所となることを確信する。ただ「無害」と「逸脱」の間でバランスを取るのは難しく、それ故すぐれたコメディアンや漫画家たちは常に観察眼を磨き、訓練を積んでいると述べ、我々もたとえ目の前の状況が絶望的であったとしても、その「逸脱」をなんとか「無害」に変えていく方法を探っていけばよいと提案する。

「逸脱」を「無害」に手っ取り早く変換する方程式などはないようだ。「逸脱」と「無害」の間で絶妙なバランスを取り、人や状況をポジティブな方向に向けていくには、透徹した観察眼と厳しい訓練、そしてアマゾンの奥地でパッチ・アダムスが彼らに示唆したように「愛に満ちた人間関係」¹⁸が必要であろう。それでは特別な訓練を積んだ専門家にしか無害化を起こすことはできないのだろうか。バーガーはそのことに関して希望を与える見解を示す。彼は「温和なユーモア」という日常生活の中のありふれたユーモアの価値を語る。「温和なユーモア」の一例として彼は幼い女の子が母親の服を着ておめかしをする様子——大きすぎるドレスに体は埋没し、ぶかぶかのハイヒールに鼻の上までずり落ちてくる帽子をかぶって、よろよろ（しずしずと）と部屋を歩き回る——を挙げる。家族はこの様子をひどくおかしがることはまちがいないし、たまたま入ってきたヨソ者にも同じ反応が見られるであろう。ほかの種類の滑稽さと異なって、この種のユーモアは念入りにしつらえたり、きっちりと組み立てたりする必要がなく、ごくふつうの生活の営みのなかに、一瞬の中断というかたちで出現するとバーガーは述べる。それはごく日常的な状況がはらむ種々のズレに対する自然発生的な反応であり、人にまるやかな慰めを与え、知性に過剰な要求をせず、無害で天真爛漫である¹⁹。

音楽療法で求めるべきユーモアの形のひとつとして、この「温和なユーモア」は重要である。高齢

や障害のために社会の中で正当に評価されない人々と共に、社会の「逸脱」を告発し、かつそれを「無害化」する方向性を音楽療法はとるべきであろう。バーガーの以下の叙述はその指標となり得る；

温和なユーモアは、意識的につくられる場合にのみ、非常に特殊なものではあるが限定された意味領域を構成する。それは日常生活にきわめて近いのだが、そのなかの痛々しいものやおそろしいものがすべて除去されている。それはほんのつかの間ではあるが、やわらかい日ざしにあふれる世界を出現させる。その効果は、実存の重圧から心身をリフレッシュする短期休暇といったところである²⁰。

4. 音楽療法場面でのユーモアと笑いについて

ユーモアは「愉悦」や「おかしみ」を演出する技法であり、笑いはその結果として起こる身体反応である。「愉悦」や「おかしみ」というポジティブな感情がホルモン系に作用し、続いて起こる笑いが腹筋や心肺機能を賦活化すると考えられ、精神にも肉体にもプラスの効果を与えると考えられている。通常ユーモアと笑いはセットになって起こるが、本来それは別物であり、ユーモアを感じても笑わない時もあるなどその結びつきの程度も様々である。突発的な大笑いもあるし、じわじわこみ上げる笑い、ほのぼのとした温かさを呼び起こす笑いもあるなど、ユーモアや笑いはその種類によって、それが発生する場によって、また受け取る側の文化や個性によってさまざまなレベルがある。こうした多種多様なユーモアをどのように音楽療法に導入していくかという問題はきわめて複雑である。最近ではユーモア刺激なしに笑うことをエクササイズとする笑いヨガ (Laughter Yoga) と音楽療法の併用例はあるものの、笑いやユーモアと音楽療法を結び付けた例は少ない。筆者は2010年以来、主にコミュニティ音楽療法の中で笑いが果たす役割について研究実践を重ねてきた。音楽はコミックバンドやオペレッタなどが示すように、ユーモアとも結びつきやすく、ユーモアの効果を増幅する役割も有している。ここでは筆者がコミュニティ音楽療法の中で用いたユーモア例を振り返りつつ、「無害化」の見地から考察したい。

①コミュニティ音楽療法の概要

2006年から子飼地域の在宅高齢者の健康増進と地域交流を目的として、子飼商店街内の大学施設で週1回実施²¹。授業(芸術学実習)としての位置づけで、音楽療法士の他、大学院生、学部生も参加する。歌唱、軽い体操、簡単な楽器演奏の他、歓談や笑いで参加者間の交流を目指す。

②ユーモアや笑いを取り入れた例

発声の向上、歓談の促進を目的として、初期段階から笑いを取り入れる。その方法は替え歌、物まね、コメディ創作を主なものとし、対話の中でもジョークを頻発する。

・替え歌 懐メロの「東京ラブソディ」を「子飼ラブソディ」に変える。

「東京ラブソディ」は昭和11年に国民的歌手藤山一郎が歌った昭和歌謡の名曲である。東京の銀座や神田の街を舞台とした都会的な歌詞とリズムカルな音楽は、当時35万枚を売り上げるというヒット

曲になった。その歌詞の「東京」に関する部分を「子飼」に置き換え（例：銀座→子飼、ニコライの鐘→マルシヨクの鐘）、その落差を笑いのネタとした。ハイカラな歌が身近な歌に変わった不調和は大きな笑いを引き起こした。

・物まね 東海林太郎、菅原都々子、高峰三枝子の物まね

有名歌手の特徴ある仕草や発声（例：東海林太郎の直立不動姿勢、菅原都々子のビブラートをきかせた高音歌唱、など）をデフォルメして音楽療法士が歌唱し、扮装なども工夫する。物まねはいつの時代にもコミカルな演芸の代表だが、元の形（オリジナルスキーム）を知っていることが条件であり、笑いの焦点はそれからどのくらい逸脱したかに絞られる。ただ物まねはオリジナルを面白おかしく揶揄する攻撃性もあるため、そのオリジナルに愛着がある人にとっては不快なものになる。そこに留意することが大事だが、上述の有名歌手たちは現代とは時間的距離も遠く、無害化されやすいと思われる。

・コメディ創作 「月の法善寺横丁」のパロディ劇

昭和35年に藤島桓夫が歌ってヒットした「月の法善寺横丁」は料亭の娘とそこで働く若い板前の恋を歌ったもので、台詞も入った劇仕立ての曲である。音楽療法士と学生たちで、料理の修行に出かける前の別れを惜しむ二人を、危険物（板前の包丁）所持のかどで間抜けな巡査が交番に引っ張っていくというコメディに仕立てた。原曲の持つ悲劇性とコメディの喜劇性が不調和を生み出し、板前の命である包丁を危険物所持という現代社会的発想でとらえた点に面白さがある。3番まである曲のうち、1番と2番の間および2番と3番の間に劇をはさみ、1, 2, 3番は参加者に歌ってもらった。そのことにより、参加者は単なる観客ではなく、コメディに参加している感覚も持ったようだ（笑って歌えない人も多かったが）。

③考察

コミュニティ音楽療法の現場は自由参加であり、誰でも参加できる形態になっている。そこでまず重要なのは、音楽を共にする以前に、共に歌いたいと思わせる場作りを行うということである。その点笑いの導入は音楽だけでは足りない部分を補足して、場の雰囲気や温かい和やかなものことに貢献した。また笑いに関するスタッフの努力を、その出来はともかく、「思いやり」として参加者が受け取り、スタッフとのラポールが構築しやすくなったことも特筆すべきであろう。そこから参加者自身がセッションの運営に協力的に関わることになり、セラピストと参加者との平等な関係性が構築されたことも笑いの効用と言える。ただ、その笑いが参加者を不快にさせる可能性もあることは常に心に留めておくべきであろう。特に集団主義的傾向の強い日本の高齢者においては、集団内で個人の嗜好や意見が語られることはほとんどなく、したがって不快感情も表出されないことが多いので、この点は特に留意すべきであろう。また大島（2005）が指摘するように、日本のような高コンテクスト社会では、初対面の相手が全く異なる文化背景を持っているという可能性が低く、緊張を緩和する必要性があまりないため、特定の人間間やグループ内で通用する「身内」のジョークが発達するという傾向がある。このことはユーモアがグループ内の親睦や結束を強める効果を持つと同時に、外部との差異化を図る排他性を助長する場合もあるということを示唆する。現場ではこうした点に十分配慮

したユーモアの使用が望まれる。

註

- 1 Hobbes (1840) : p.46. (筆者訳。ただし「大得意」という訳語に関しては、水田洋・田中浩訳 (1966) 『リヴァイアサン』、p.42. を参照した。)
- 2 スペンサー (1982) : p.130.
- 3 フロイト (2008) : p.174.
- 4 アリストテレスは「話し手が笑いをとるひとつの方法は、聞き手に一定の予期をいだかせておいて、次に彼らの予期しなかった何かで面くらわせることだ」と述べている (アリストテレス (1968) p. 236)。
- 5 カント (1965) : p.252.
- 6 マーティン (2011) : p.76に再録。
- 7 ケストラ (1966) : pp.94-95.
- 8 バーガー (1999) : pp.81-83.
- 9 バーガー (1999) : p.73.
- 10 Topolinski, S. と Reber, R. は大規模な心理学調査の結果、創造的なつながりを見いだすという体験は本質的に人に快感をもたらすと報告している (マグロウ、ワーナー (2015) : p.107)。
- 11 McGraw, P., Warren, C.A. (2010). Benign Violations: Making Immoral Behavior Funny. *Psychological Science*, 21 (8), 1141-49.
- 12 「人間がある状況を『主観的なモラル原則』から逸脱 (V) していると感じ、それでもなお状況がノーマル (N) だと認識している場合に、笑いは起こる」 (マグロウ、ワーナー (2015) : p.22より再録)
- 13 マグロウ、ワーナー (2015) : pp.25-28.
- 14 McGraw, P., Warren (2010), p.1142.
- 15 マグロウ、ワーナー (2015) : p.28, p.31.
- 16 マグロウ、ワーナー (2015) : p.25.
- 17 マグロウ、ワーナー (2015) : p.59.
- 18 マグロウ、ワーナー (2015) : p.334.
- 19 バーガー (1999) : pp.174-178.
- 20 バーガー (1999) : pp.177-78.
- 21 2014年度より同地域のコミュニティセンターで月2回の実施となっている。

【参考文献】

- アリストテレス (1968) 『弁論術』 (山本光雄訳) 『アリストテレス全集第16巻』、岩波書店
 バーガー, L.P. (1999) 『癒しとしての笑い』 (森下伸也 訳) 東京: 新曜社
 フロイト, S. (2008) 『機知—その無意識との関係』 (中岡成文他訳) 『フロイト全集』 8、岩波書店
 Hobbes, T. (1840) : Human Nature, or The Fundamental Elements of Policy. *The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury*, edit. by Molesworth, B. vol.4, p.46.
 ホッブス, T. (1966) 『リヴァイアサン』 (水田洋・田中浩訳) 『世界の大思想』 第13巻、河出書房
 カント, I. (1965) 『判断力批判』 (原佑訳) 『カント全集』 第8巻、理想社

- 木村洋二 (1983) 『笑いの社会学』 京都：世界思想社.
- ケストラー, A.(1966) 『創造活動の理論(上)』 (大久保直幹・松本俊・中山末喜 訳) 東京: ラティスマーティン, R.A.(2011) 『ユーモア心理学ハンドブック』. (野村亮太、雨宮俊彦、丸野俊一 訳) 京都：北大路書房
- マグローウ、ワーナー(2015) 『世界笑いのツボ探し』 (柴田さとみ訳) 東京：CCCメディアハウス
- McGraw, P., Warren, C.A.(2010). Benign Violations: Making Immoral Behavior Funny. *Psychological Science*, 21(8), 1141-49.
- 大島季巳江(2005) 「高コンテクスト社会と低コンテクスト社会のコミュニケーションにおけるユーモア」 『笑い学研究』、12, pp.29-39.
- スペンサー, H. (1982) 「笑いの生理学」 (木村洋二訳)、『関西大学経済・政治研究所研究双書』 第49冊
- Veatch, C. Th.(1998). A Theory of Humor. *Humor: International Journal of Humor Research*, pp.161-215.